

子供が各家庭訪問「ろうそくもらい」

七夕の風習で 地域交流促進



電信通り商店街振興組合(長谷渉理事長)は、道内の一部で古くから行われている七夕の風習「ろうそくもらい」を導入し、商店街周辺地域のコミュニケーションを促す。今年8月5日の「電信通・西別院盆おどり」の会場で初めて行い、来年以降は地域の商店や一般家庭への訪問に拡大させるなど定着を図る。

帯広電信通り商店街

ろうそくもらいは、子供たちが「ろうそく」を出せ、の七夕に合わせて、函館出せよ、出さないとかっなどの道南や道央で行わ「ちやくそく」などと歌いながら、家庭でローソクや菓子をもらって歩く風内会の行事として行われ



8月「盆おどり」模擬店で試行

た地域もあった。高齢者や障害者と共生・協働を掲げて活性化に取り組み同商店街は、周辺に住む子供たちが安心して安全に過ごせる地域づくりも目指す。

長谷理事長は「ろうそくもらいを通して、子供たちに商店街で働く人たちの顔を知ってもらい、足を運ぶきっかけになれば」と話す。

今回は盆踊りの会場(本願寺帯広別院境内)で、子供たちがちょうちんを持って模擬店を回る。近隣の幼稚園や保育園などで事前にろうそくもらいの歌を練習する機会も設ける。

子供たちに手渡す菓子は、菓子メーカーの明治とカルビーが約300個を提供する。両社は昨年からは、ろうそくもらいの定着を図る団体に菓子の提供を始め、昨年は提供をきっかけに札幌や釧路、小樽などで開催された。

同組合は来年以降も地域のイベントとして継続する方針で、「商店街の各店や近隣の住宅を回れるように協力を得たい」と(長谷理事長)としている。(深津慶太)

「まちマイ」は25面に掲載